

# キリスト教無神論

## —— 神の死の神学 ——

植 村 信 久

われわれは神の死は歴史的な出来事であることを認めなければならぬ。神はわれわれの時代、われわれの歴史、われわれの存在において死んでしまった。

アルティザー

最近アメリカにおいて、「神の死」の神学 (the Death-of-God theology) が流行している。この新しい神学は既にアメリカの各神学校において話題にのぼっていたが、1965年ニューヨークの諸新聞やタイムその他の雑誌が一斉にそのニュースを掲載するにおよんで、全米にわたって一般的な関心を喚び起すようになった。

「神の死」の神学の指導者たちは、現代神学の怒れる若者 (angry young man) とか、ペックの悪童 (Peck's bad boy) とか、恐るべき子供 (enfant terrible) とか呼ばれるには少し年をとりすぎているが、いずれも30才台から40才台にわたる年齢層のものたちである。「神の死」の神学 (the "God is dead" theology) の最もよく知られている唱導者は、エモリー大学のアルティザー (Thomas J. J. Altizer)、コルゲート・ロチェスター神学校のハミルトン (William Hamilton)、テンプル大学のバン・ブーレン (Paul M. van Buren) であり、このほかシラキュース大学のバハニアン (Gabriel Vahanian) もその陣営に属している。驚くべきことは、この4人の指導者のうちの2人が聖公会の信徒と司祭であることである。すなわちアルティザーは聖公会の信者であり、バン・ブーレンは聖公会の司祭である。

「神の死」の神学者たちは、次のように主張している。「われわれは、いまままで神学的無知の時代を経過して来た。しかし今やわれわれは、すべての神学的言葉—保守主義にせよ、自由主義にせよ—が無意味で陳腐になって来たこと

を発見した。神学はもはや伝承的基盤を失ってしまったので、その歴史的同一性に反して語るときにだけ、神学的な意味をもつことができる。最近まで神学者たちは、危機とその打開について、偽実存的な言葉 (a pseudo-existential language) で語ることができたが、そのような神学は、歴史的過去 (historical past) の地平線の彼方に消失しつつある。今日神学者としての問題は、有意味に適切に語ることではなく、それ自身を語るために、根本的な障害に打ち勝つことである。」(アルティザー) そして彼らは宣言する。「現代の大きな新しい事実、世界からの神の消失である。われわれの神学は、神の死の神学でなければならない。」(ハミルトン) 彼らが主張する「神の死」とは一体何を意味するか。彼らは必ずしも、神についてのキリスト教の伝承的イメージは消失した、とは論じない。また彼らの神学は、無神論的ヒューマニズムや自然主義神学ではない。さらに「神は存在するか」という質問に対する否定でもない。彼らの神学は、知的な懐疑論にもとづく無神論でもなく、悪と苦痛の経験から出発した無神論でもない。彼らは主張する。「神の死」という言葉は、神の不在 (absence)、消失 (disappearance)、消滅 (eclipse) とか、隠れた (hidden) 神という言葉と区別しなければならない。現代神学の秘訣は、神の教理をもたないこと、すなわち「神の死」を証することである。キリスト教の歴史に存在する神や、われわれが過去に生きるかぎり礼拝する神は、われわれが現代に生きる信仰を可能にするために死ななければならない。「神の死」のキリスト教的な告白は、神自身の真の喪失というアッピールである。歴史のうちに行動する神を考えたり信じたりすることは、もはや可能でなくなった。それ故キリスト教は、神なしに生き残らなければならない。神は現代から撤退した。神の撤退のときに、神という名前を語ることは瀆神であり、かつて神の存在を証した信仰を愚弄する以外の何物でもない。神の喪失を宣言するときに、神が神であることを許すことはできない。このような「神のないキリスト教」(Godless Christianity) は、全くアメリカ的な現象であるが、その思想的な系譜は、ヨーロッパの思想家に由来している。「神の死」の神学者たちは、キエルケゴール (Søren Aabye Kierkegaard, 1813~1855) から「組織されたキリスト教は、不適當で時代おくれの文化形態の背後で、福音の真のメッセージを曖昧にした、一種の偶像礼拝である。」という考えを発展させた。さらに彼らは、「宗教のない

キリスト教」(religionless Christianity)の必要と、神を認めない「成年に達した」世俗社会とを語るボンヘッファー (Dietrich Bonhoeffer, 1906~1945) の歩みに追従する。彼らの「神の死」という宣言は、新しい急進的な神学の否定的な出発点にすぎない。彼らは、いろいろの方法において「神のないキリスト教」を説いている。

しかし神の否定は、全く新しい発想ではない。1822年コント (Auguste Comte, 1798~1857) は、すべての知識が通らなければならない、三つの段階を指摘した。(1)神学的すなわち架空の段階、(2)形而上学的すなわち抽象的な段階、(3)科学的すなわち実証的な段階。人間は神学的段階から科学的段階にうつるにつれて、小児的で皮相的な信仰を捨てて、真の科学的な理解に達する。コントは、こういう考え方を思想史に適用して実証的な宗教を説いた。1851年彼は、「私は1860年以前にノートルダム寺院において、唯一の真の完全な宗教としての実証主義を説教するだろう。」と予言した。彼の予言は遂に実現しなかったが、彼の弟子たちはいたる所で実証主義を鼓吹している。

マルクス (Karl Marx, 1818~1883) も神を否定した。彼によれば、宗教は神話的、迷信的な領域に属する。彼が「宗教は阿片である。」というときに、コントと共通の基盤に立っている。共産主義はマルクスに従って、キリスト教の撲滅と無神論の宣伝に狂奔している。フロイド (Sigmund Freud, 1856~1939) も同じように、神の概念とキリスト教を攻撃した。彼は神は人間の想像の産物であり、自我の不完全な欲求によって造り上げられる。従って宗教は妄想であるといった。神を否定する他の人々のうちに、無神論的な実存主義者がいる。実存主義者を二種類にわけることができるが、その一つが無神論的な実存主義者であり、カミュ (Albert Camus, 1913~1960) やサルトル (Jean-Paul Sartre, 1905~) やハイデッガー (Martin Heidegger, 1889~) 等によって代表される。

「神は死んだ」(God is dead) という表現でさえ決して新しい言葉ではない。この表現は19世紀にニーチェ (Friedrich Wilhelm Nietzsche, 1844~1900) によって最初に用いられた。彼はその著「道徳の系譜」(Genealogy of Morals) のなかにおいて、今日再び現われた「神の死」というムードを述べている。

次に「神の死」の神学者たちの所説を簡単に紹介しよう。

アルティザー Thomas J. J. Altizer

彼は聖公会の信者であり、エモリー大学の聖書と宗教の教授である。彼は「神の死」の神学を、他の指導者たちの誰よりも、最も確信に満ちた情熱をもって、鼓吹している。

もしキリスト教神学が、その直面する瞬間に対して語りかけることができるとするならば、現代の神学は、伝承的な信仰形態の可能性を解消する瞬間に、語りかけることを余儀なくされる。われわれは消失した過去をなげくけれども、キリスト教はわれわれの周囲において既に腐蝕しつつある。キリスト教の土台は、過去の暗い太洋のなかに消失してしまったので、われわれは後退しながら、打ちよせるさざ波を経験するだけである。神学は信仰という島を打ち立てて、信仰はアプリオリ (a priori) であり、自律的であると宣言した。しかし運命の波は、この島を呑みつくしてしまったので、も早やこの島は見えなくなった。すなわち信仰という島は、歴史的現在 (historical present) から消失してしまったので、その燈台は信仰の空虚を反映する鏡となった。それ故神学はわれわれの歴史から全く孤立して、今や沈黙を守っている。かくして、われわれは過去の瞬間に縋るか、あるいは全く新しい信仰の形態を取るかの必要に迫られている。

いままでの神学者たちは、キリスト教の過去 (the Christian past) を記憶する、祭司の役割を演じて来た。彼らの機能は、過去を現在と関係させるために、過去を記憶する機能である。神学者たちは、失われた時代をさがし、忘れられた時代を記憶する役割を演じて来た。しかし現代の神学者は、も早や記憶の役割を演じることができないことを、告白する。彼らはキリスト教の過去 (the Christian past) の言葉をもって語ることをできないことを知る。彼らはキリスト教の歴史の言葉を記憶したり、繰り返すことが不可能になった。何故なら、彼らは如何なる意味においても、歴史的教会の信条や告白に基くクリスチャンでないからである。これが彼らが失った過去である。それ故彼らは発見することができない過去に否 (No) と言って、あらゆる過去の信仰形態を否定する。

最も顕著な神学的特徴は、神学自身が、現代は「神は死んだ」(God is dead)

時代であると告白するようになったことである。今までの神学者たちは、「神の死」を明確に語ることができなかったが、今や「神の死」を宣言する神学運動は、不可避的になった。われわれはもはや、神について語ることは出来ない。それなら「神の死」の現実をどのように語るべきであるか。「神の死」について語ることを拒否することは、われわれが直面する瞬間を顧みないことであり、歴史の現実を避けることであり、われわれの真中にあるキリスト教の言葉を語る可能性を、締めだすことである。われわれの歴史がもはや神が存在しない歴史であるなら、われわれは、「神の死」を決意するように呼びかけられており、神が死んだ歴史の瞬間に直面して、神学は、「神の死」を宣言しなければならない。

さて「神は死んだ」(God is dead)ということは、一体何を意味するか。第一に、現代人は神を信じることができないとか、現代文化は神の存在からの偶像的逃避であるとか、われわれは神が沈黙する時代に生活しているとか、言っているのではない。神は人間的な信仰の表現に超越するとか、神は形而上学と宗教の神の上にあるとか言うことは、可能ではない。「神の死」を宣言する神学的な陳述は、神は、信仰という言葉のうちに存在しないことを意味する。神は歴史から消失したので、神はもはや信仰のために存在しない。今日神は真実に不在である。神は視界から隠れただけではない。神は真実に死んだのである。「神の死」を決定的な出来事として承認するときに、われわれは始めて歴史の現実性を受けいれることができる。

クリスチャンだけが、真に「神の死」を宣言することができる。オーソドックスな神学が、「神の死」の宣言はキリスト教の信仰であり得ないと断定することを、許すべきでない。新しい神学者たちが、キリスト教の伝承的な言葉を語り得ない事実、彼らがクリスチャンであることを拒否することを意味しない。

以上は、「神の死」についてのアルティザーの主張であるが、彼は「神の死」の歴史性(historicity)を強調している。彼は「神の死」を出来事(an event)、歴史的な出来事(a historical event)であると主張する。しかしわれわれは、このような彼の主張を、その儘承認することはできない。彼は現代神学の自明の事実として、「神の死」を宣言するが、どのような状態の下において

その出来事が起ったかについて、彼は全く沈黙している。アルティザーは、「神の死」の宣言はキリスト教的であり、キリスト教神学であると確信しているが、彼はその主張を弁護するために、言葉 (Word) とインカーネーションという二つのテーマを用いている。確かに「神の死」の神学は、フオイエルバッハ (Ludwig Andreas Feuerbach, 1804~1872) の無神論や、ハックスリー (Julian Sorrell Huxley, 1887~) の科学的ヒューマニズムとは区別されるが、彼が言葉 (Word) について多言していることが、「神の死」の神学を直ちにキリスト教神学とするかは、甚だ疑問であると言わねばならない。

われわれは、アルティザーの「神学は、その前にある具体的な時間と空間に直面する、受肉の言葉 (Word) を語ることによってのみ、キリスト教の形態を保つことができる。」と言うことに同意するが、それに続く「キリスト教神学が信仰の言葉 (Word) を証しすべきであるなら、「神の死」を宣言しなければならない。」という彼の主張を、そのまま肯定することはできない。彼がいう信仰の言葉 (Word) とは何であるか。これに対して彼は、「キリスト教の言葉 (Word) は、永遠の神と同一視することもできないし、また不変の神の特殊な表現として、理解することもできない。」と答えるだけである。

アルティザーは聖書が証し、教会が教える歴史的イエスは、も早やわれわれにとって現実であり得ない、と確信している。「イエスについての教会のイメージは、われわれの歴史から消失し、新約聖書のイエスとわれわれの時間と空間とを仲保するあらゆる可能性は消失した。」さらに彼は言っている。「歴史的イエスの消失は、より深い現実である「神の死」の、特殊な表現にすぎない。」神は、われわれの視界から隠れたのでもなく、われわれの無意識や無限の空間の深みのうちに潜んでいるのでもなく、また運命という歴史的車輪の廻転の上にも現われもしない。「神は死んだ。」それ故神学者は、「神の死」がわれわれの思想と経験のあらゆる形式の基礎であることを認めなければならないと、アルティザーは主張する。

#### ハミルトン William Hamilton

彼はコルゲート・ロチェスター神学校の組織神学と歴史神学の教授である。彼は「神の死」の神学には、三つのテーマがあると言っている。三つのテーマ

とは「神の死」(death of God), キリスト論(Christology), 楽観主義(optimism)である。この三つのテーマは、この新しい神学運動の指導者たちにとって、等しく重要ではないが、その指導者たちはこの三つのテーマのいずれかを代表している。

第一のテーマは、神の喪失という共通の経験に関係している。この経験は、「神の死」という言葉をもって表現されている。「神の死」とは、一体どういうことであるか。ヘーゲル (Georg Wilhelm Friedrich Hegel, 1770~1831)にとって、それは、十字架の死の内面的な意味をのべる象徴的な方法以上のものであった。ニーチエ (Friedrich Wilhelm Nietzsche, 1844~1900) にとって、それは19世紀ヨーロッパの時間と空間のうちにある、現実のできごとであった。サルトル (Jean-Paul Sartre, 1905~) にとって、それは今日のヨーロッパの知識階級は、もはや神を信じることができないことだけを意味する。「神の死」は出来事(an event)であるが、若しそうであるなら、それは何時おこったのか。歴史的・本体論的な現実の一部として、世界のそと (out there) においてであるか。あるいはそれを信じる自己の一部のうちにおいてであるか。あるいは、われわれの言葉のうちにおいてであるか。ハミルトンは、「神の死」は出来事(an event)であるという考え方を避けて、今日西欧のクリスチャンのうちの特定のグループのうちに起っているものを、記すための隠喩 (metaphor) として語っている。

隠喩としての「神の死」は、神学的な談話において、神の不在 (absence), 消失(disappearance), 消滅(eclipse), 隠れた (hidden) 神というような言葉と区別される。真の喪失、取りかえしのつかないものは、死という隠喩によって描写される。失われたものは見出される。隠れたものは自らを知らされる。それ故ハミルトンは、過去 100 年以上の間、特別な歴史をもつ「神の死」という言葉を述べる必要があると主張する。

第二のテーマは、キリスト論 (Christology) に関係している。「神の死」の神学者たちのすべてが、キリスト論の問題に沈潜していないが、彼らのすべては、クリスチャンであるという主張をしている。ハミルトンは、「神の死」のときはイエスに対する服従のときであると主張する。これによって新約聖書のイエスを知らせることができ、イエスに対する服従は、キリスト教の信仰と生

活に対する可能な中心となる。このような神がないキリスト論 (Godless Christology) には問題があるが、ハミルトンは次のようにいっている。「あなたが神—イエスの神—に近づき難いと告白するときに、あなたは、イエスに従順であると主張することができるか。」「あなたは、どのようにして従順であろうとするか。」「あなたの従順は気まぐれではないか。」

しかし「神の死」の神学者たちのイエスに対する服従は、他のすべてのクリスチャンと同じように、不完全な服従である。それ故彼らに対して次のような質問がなされる。「何故あなたは、イエスを服従の対象として選んだか。」「イエスでなければならない、特別な理由があるか。」「あなたは、キリスト教神学ではない、キリスト教化されたヒューマニズムである「神の死」の神学の中心に、イエスを置いているのではないか。」しかし「何故イエスカ」という質問に答えることは容易ではない。われわれはも早や、啓示の教理に基く答えを利用することはできない。またわれわれは「神はイエスによって御自身をわたしに知らせたから、わたしはイエスを神と人間の理解の中心として考える。」という古典的な教理に訣別しなければならない。それならわたし（ハミルトンは神学教授である）は、職業的な言葉を用いて答えなければならないか。「わたしは、牧師を志願する人々の準備をすることによって、教会に奉仕するように召された者であるから、イエスを選んだのである。」否、イエスはわたしを悔い改めさせ、わたしの前に立ち、わたしの道であるところの者である。イエス以外にもつと力ある者、イエスの死以外にもっと印象的で感動的な死があるかも知れない。しかしわたしはイエスを選んだ。それ故わたしの選択は気まぐれではなく、わたしは無神論者のレッテルを押されることを避けるものではない。

第三のテーマは、「神の死」の神学は、楽観的な神学 (an optimistic theology) であるということである。「神の死」の神学は罪の教理をもっているが、罪の教理は、その中心的な教理ではない。楽観主義とは、苦難と悲劇を感じないという意味でもなく、また不可避的な進歩をも意味していない。この新しい神学は、今日のアメリカ生活のうちにある希望と楽観主義—人々の生活に実質的な変化をもたらすことができるという確信—と関係している。このような楽観主義の神学は、激変する世界、新しいテクノロジーとオートメーションとマス・メディアを肯定し、われわれがウエストランド時代 (the Westland era)



の終焉、疎外の時代の終焉にあることを認め、テクノロジーとスピードとアーバンゼーションに対する敵意の決定的な停止を叫ぶものである。さらにこのような楽観主義は今日のニグロの革命のうちにも見出されるが、「神の死」の神学は、現代アメリカの生活のうちにある決定的な運動から学んで、答えようとするものである。

アルティザーは 仮借ない 筆致をもって、「神の死」の神学を 鼓吹しているが、ハミルトンは 控目に「神の死」の神学を記述している。

ハミルトンは、1960年デンバーのナショナル、インター・セミナリー、ムーブメントの会議における講演において、次のように宣言した。「現代の大きな新しい事実、世界からの神の消失である。われわれの神学は、「神の死」の神学でなければならない。」また彼はクリスチャン・スカラー(Christian Scholar) 誌の1965年春季号において、「われわれは神を知らない。われわれは神を礼拝しない。所有しない。信じない。……われわれは神の経験の不在について語っているのではなく、神の不在の経験について語っているのである。」と告白している。ハミルトンは、ビート族の詩や音楽や大衆芸術に見出され、公民権のデモンストレーションに興奮する、現代人(the modern man) の典型である。しかし彼にとって「神の死」とは、暴君の暴力からの解放のような面白さではない。「神の死」とは、人間の社会と文化と歴史から意味を取り去る信号である。それ故彼にとって「神の死」は悲しい面をもっている。

この点において、ハミルトンは、イエスを隣人と共に立ち、隣人を代表する軽蔑されたイエスとして紹介している。彼はボンヘッファー(Dietrich Bonhoeffer) の表現を提出する。「イエスは、他人のためのものである。そしてわれわれは、神のない(Godless) 世界において、彼と共に苦しむように召されている。」ハミルトンによれば、今日の神学者にはもはや信仰も希望もない。愛だけが残されている。「神の死」の神学者たちのうちにおいて、最も倫理的な関心が強い彼は、人間は行為の模範としてイエスに服従するように召されていると結論する。この場合に、彼は、イエスを人間の対象としてではなく、あるべき場所(a place to be) として定義している。彼は、イエスの場所とは、平等を求めるニグロの闘争、テクノロジーの社会形態、世俗的な世界の技術と科学の真只中にあると主張する。かくして彼は次のように強調している。「神の死」

の時代において、われわれは、あるべき場所 (a place to be) をもっている。」  
「それは祭壇の前にはなく、必要な隣人と敵をもつ世界のうちに、また都市の  
うちにある。」と。

バン・ブーレン Paul M. van Buren

彼は神学博士 (Th.D.) の学位をもつ聖公会の司祭である。彼はテキサス州の  
オースチンにあるザ・サウスウエスト神学校の教授であったが、現在は、フィ  
ラデルフィアのテンプル大学の宗教の教授である。彼はアルティザーやハミル  
トンと著しく相違する経験論者である。ハミルトンは、アルティザーの「神の  
死」の神学が精緻でないことを認めたが、バン・ブーレンは、アルティザーの  
ヴィジョンに泣き、涙をおさえてアルティザーの論述は理解し難い、と評価し  
た。この事実が、「神の死」(theothanopsis) の神学の三人組—アルティザー  
とハミルトンとバン・ブーレン—の第三男と目せられている者からの全く予  
想されなかった告白である。さらに彼は、「神の死」の神学に参加する学者や  
牧師のグループは相互に接触し、会合を計画し、機関誌を発行しようとしてい  
るという、ハミルトンの宣言(The Shape of a Radical Theology において述  
べられた) に驚きを示している。以上は、3人の「神の死」の神学者の間に未  
だ十分なコミュニケーションが成立していないことを示している。

バン・ブーレンは、神の再現(reappearance)を見込む神についての如何なる  
談話も、哲学的には全く無意味であると結論している。彼は、言葉 (words) の  
使用方法を吟味して、経験的に証明できない陳述の客観的真理を否定する、言  
語分析(linguistic analysis)の唱導者である。「福音の世俗的意味」(The Sec-  
ular Meaning of the Gospel)において、彼は、分析哲学の見地から、キリスト  
は真実に人間であり、真実に神であるという、カルケドンの教義の再陳述を企  
てている。彼は、人間についてのキリスト教々義を再言する方法を考察して、  
中心的な神学的範疇としての人間の想像力を、検討する。すなわち宗教は、人  
間の想像力のどれだけの部分であるか、そして想像力は、人間生活のあらゆる  
面に対して重要であるかと。

彼は神の葬送 (funeral) について泣きもせず、またアルティザーのように神

の葬送に歓喜もしない。彼は言語的病弊の臨床的診断者の役割を演じる。彼は神(G-o-d) という三文字から、意味のジュースを圧搾することは、も早や可能ではない、と主張する。そして神という言葉は、も早や如何なる意味も伝達しないから、神という言葉が関係するものに対して、確実とされた現実には、意味があるかどうか疑わしい。それ故神は、歴史的な出来事(a historical event)としての死を味わなかった。神についての彼の描写は、ハックスリー (Julian Sorrell Huxley, 1887～) のようである。「宇宙というチエシャ猫の、最後の消えゆく微笑。」宇宙という猫は、死んでしまった。微笑は消える。真空だけが残る。いな真空だけではない。われわれは、神学的には神という言葉なしに語るのであると、バン・ブーレンはいう。何故なら神という言葉 (God-language) は、現代の知識の交換市場において、現金の価値が全くないからである。

雑誌ニュー・ヨーカー(New Yorker)において、ベッド・メスタ (Ved Methta) は、バン・ブーレンが次のように語ったと記している。「私は祈らない。……私は聖職按手をうけたが、説教や礼拝司式を依頼されるときには、通常そうしたくないと答える。もしそれが不快な方法において依頼されるなら、わたしは聖職を剝奪されることを求める。もし聖公会の権威者が私のところに来て、わたしのしていることが異端であるというなら、わたしは直ちに聖職を剝奪されることを求める。」聖公会の司祭であり、神学校の教授であった者として、これは驚くべき発言である。

バン・ブーレンにとって、「神は死んだ」が、イエスは残っている。彼がオーデン (W. H. Auden) のボンヘッファーを称賛する「福音の世俗的な意味」(The Secular Meaning of the Gospel) に序文を書いている限り、彼は、ボンヘッファーの獄中書翰のイエスを保持しようとしているようである。さらに彼はカルケドンのキリスト論 (Christology) と相違しない言葉をもって、イエスを提示しようとしている。しかしボンヘッファーのイエスと、バン・ブーレンが世俗的な映像を据えつけるカルケドンのキリストの顔を見わけることは、果して可能であろうか。

バハニアン Gabriel Vahanian

アルテイザーとハミルトンとバン・ブーレンは、予言者的な迫力をもって「神の死」を宣言しているが、シラキウス大学の教授バハニアンは、何故神

の葬送が必要であるかを説明することだけに満足している。彼は他の3人の人のものたちよりも保守的である。バハニアンは、もともと神についての人間の知覚を分析することに興味をもつ、宗教社会学者また文化史学者である。もし神が存在するなら、神は人間自身の文化によってのみ人間に知られるから、神は、根本的には偶像(an idol)であると彼は論じる。そして彼は次のように主張する。「神学的にいうならば、神についての如何なる概念も、近似であり得るだけである。」「神だけが、神についての概念をもつことができる。」

バハニアンは、神についての教会の概念は、原始的なキリスト教とギリシア哲学との出会いの産物であるから、も早や世俗の文化に対して適切でなく、露出過度によって骨抜きになってしまったか、あるいは全く否認された偶像であると考えている。かくして彼は、「神は死んだ」、そして教会が時代の文化的必要をみたす方法において、神を新らしく宣言するために、構造と思想において十分世俗的になるまで、「神は死んだ」ままであると宣言する。時代の精神は、取りかえしがつかないように世俗的であるから一超越と他界主義のすべての観念は全く否認されて一、バハニアンは、この現実がどのようにして生じたかを、歴史的に説明しようと努力している。

ハミルトンは、「わたしは私の教師たちによって建てられた神学の殿堂―第二次世界大戦直後の（ニュー・ヨークの）ユニオン神学校―に止る明かな理由をもたない。」といているが、ハミルトンとバン・ブーレンが、彼らの教師たちから180度の急転換をなしていることは、極めて興味ふかい。すなわちハミルトンはニーバー(Reinhold Niebuhr)とベイリー(Donald M. Baille)から、バン・ブーレンはバルト(Karl Barth)から。しかしアルティザーは依然として偉大な宗教学者エリアーデ(Mircea Eliade)の忠実な弟子である。

## 批 評

若干の神学者たちは、「神の死」の神学という新しい神学に、かなりの価値を認めている。

ハーバード大学のカウフマン(Gordon Kaufman)

「この神学運動は、神学者たちに、神の教理の再検討を企てることを要求す

る。」

ティリッヒ (Paul Tillich)

有神論の神の上に立つ「神の上なる神」(God above God)を説いたティリッヒを、アルティザーは、アメリカにおける「神の死」の傾向の父と称えている。しかしティリッヒは、その死の前夜、アルティザーとはげしく論戦した。

「この運動が、神についての記号的言語の上のものに向うかぎり、わたしはこの運動に対してイエス(Yes)という。しかし新神学者たちは、神についてのすべての記号的言語を放棄しているから、わたしは、新神学者たちに反対する。」

ハーバード大学のコックス (Harvey Cox)

新神学者たちの不正確な言語を非難して、次のようにいっている。

「これは神についての経験の喪失、キリスト教における神の経験の喪失、あるいは今日神をいいあらわす適当な言葉の欠如ではないか。」

ユニオン神学校のウィリアムス (Danial Day Williams)

次のような警句をもって、この運動の内部的矛盾を指摘している。

「神は存在しない。しかしイエスは神の独り子である。」

多くの人々は、「神の死」の神学者たちは、キリスト教をイエスが説いた道徳をもつヒューマニズムに引き下げた、と非難している。

「神のないキリスト教」(Godless Christianity)の思想家自身も、彼らが未だ首尾一貫した神学体系を築き上げていないことを、認めている。しかし彼らは、人間の歴史からの神の消失は否定することができないから、クリスチャンはそれを事実として認めなければならないと主張している。

最後に、ボストン大学の組織神学の教授であるネルソン (J. Robert Nelson)の批判を紹介しよう。第一に、今日神学が直面する諸問題に対する「神の死」の神学の新しいアプローチが、真摯で、迫力があり大胆であることを認めなければならない。この新神学が新奇であるからといって排斥できないのは、従来の神学が古実によって立証できないと同様である。われわれは激変した世界に住んでいるから、神学は改革と再陳述を迫られている。問題は、「神の死」の神学が、真実に神学的に妥当なアジォルナメント (aggiornamento) —現代の要

求に対する適応と改革一であるかどうか、ということである。

バン・ブーレンは、すべての人々を現代と前代との範疇に分類して、現代人 (the modern man) は、神学的な言葉と概念のうちに如何なる意味をも見出すことができないといっているが、現代人とは一体誰であるか。彼がいう現代人とは、大学のコンモン・ルームにおいて、言語の無意味を論じている、オックスフォードの学者 (don) によって象徴されるものではないか。

アルティザーは、クリスチャンが信じなければならないものと、信じてはいけなものを一般化している。彼は、「現代の神学者」とか「クリスチャン」とか「神学それ自身」について語っているが、彼の範疇の分類法は、すこぶる命令的である。すなわち彼は、現代の神学者は、キリストについての聖書的あるいは伝承的なイメージは、もはや意味がないことを知っているから、クリスチャンもそのように考えなければならないと主張している。

第二の問題は、「神の死」の神学者たちが、クリスチャンという言葉を用いることの、合法性の問題である。クリスチャンという言葉は、今まで漠然と無責任に用いられて来たが、この言葉には明かな関係と内容がある。それはイエス・キリストの中心性を語り、人間イエスではなく神に油をそがれたもの、甦って生きています主を語っている。3人の新神学者たちは、イエスに対する尊敬を表している。アルティザーは受肉の言葉 (Word) としてのイエスを語り、ハミルトンはイエスのうちに倫理的な模範を見だし、バン・ブーレンは人間の自由の運搬者としてのイエスを見る。しかしこの3人が描くイエスは、聖書が証し、クリスチャンが信仰する真のイエスではないから、この3人は自分たちだけが立つ所に止っているだけである。イエスが父と呼び、彼の人格と言葉と行為のうちに示したもう神を離れて、真のイエス・キリストは存在しない。

ハミルトンはわれわれをボンヘッファーの国に導くように思われるが、ボンヘッファーのいう「宗教のないキリスト教」 (religionless Christianity) は、「神のないキリスト教」 (Godless Christianity) を意味するかどうかは、すこぶる疑わしい。後年のボンヘッファーを、彼の著書の全体から孤立させることは正当でない。ボンヘッファーの初期の高いキリスト論は、そのまま世俗化されたキリスト教についての、彼の最後の著作の文脈のうちに存在することを、見逃すことはできない。もしボンヘッファーが生存しているなら、彼は、「神

の死」の神学に決して加担しないであろう。

第三に、この新神学者たちはキリスト教神学の土壌の上に、彼らの旗を打ち立てて、「神の死」の神学はキリスト教神学であると主張する。しかし彼ら自身の論述は、「神の死の神学がクリスチャンという名称をもつことができないことを立証した。かくして彼らが覇権のシンボルとして、神学の土壌に差しこんだ旗の棒は、キリスト教神学全体—カトリック、プロテスタント、自由主義、保守主義その他—の前に、マイナスのシンボルとして横たえられた。

「神の死」というアイディアは、真に魅惑的である。それは、あるものにとって痛快であるが、同時に他のものを戦慄させる。「神の死」の神学は、多くのクリスチャンに衝撃をあたえ、彼らの信仰を躓かせるから、排斥されなければならない。結論的にいえば、今日キリスト教はその教理を再検討し再考察する必要がある。改革する必要はあるが、破壊する必要はない。われわれは今日の世俗化を喜んで認めて支持する。しかしイエス・キリストの神は今や死んだという妄想を、決して承認はできない。

アイオワのある旅館の部屋の壁に、誰かが、「神は死んだ—ニーチエ。」と書いたが、他の誰かがその下に、「ニーチエは死んだ—神。」と書いた。

#### 注

T. J. J. Altizer, The Gospel of Christian Atheism.

T. J. J. Altizer, Negation in Theology.

W. Hamilton, The Shape of a Radical Theology.

P. M. Van Buren, The Secular Meaning of the Gospel.

Time magazine (Oct. 22 issue, 1965), Christian Atheism: The Death-of-God Movement.

W. L. Morlton, Apocalypse in a Casket?

J. R. Nelson, Deicide, Theothanasia, or What Do You Mean?

D. L. Miller, False Prophets in the Secular City.

L. Shiner, Goodbye, Death-of-God!

C. Boleyn, God is not Dead!

Editorial of the Christian Century (Dec. 1 issue, 1965), Why This Non-God-Talk?

Editorials of Christianity Today (Dec. 17 issue, 1965),

Strangers in the World.

Shadows of the Antichrist in the Decline of Western Theism.

Whither Theology?

P. H. Wright, Reflections on the God-killers.

Editorial of The American Church News (Jan. issue, 1966), God is Dead.

Gabriel Vahanian, Wait Without Idols.

Gabriel Vahanian, No Other God.

T. J. J. Altizer and W. Hamilton, Radical Theology and the Death of God.

Thomas W. Ogletree, The "Death of God" Controversy.

Kenneth Hamilton, God is Dead,

E. L. Mascall, The Secularization of Christianity.

W. Hamilton, The New Essence of Christianity.